芸術

「芸術」という言葉から、あなたは何を想像するでしょうか。

とても抽象的で、少し近寄りづらいイメージを持つ人もいるかもしれません。

一方で、生活の営みや遊びのプロセスすべてを芸術と捉える人もいるかもしれません。

それでは、保育の世界での芸術とは一体どのような存在なのでしょうか。

子どもが自然体験や遊びのなかで、ものと出合い、そのものを通じて感じること、

それをさまざまな形で表すこと、これらすべてを芸術とするならば、

芸術とは外界との関係のなかで「その子らしさ」をつくり上げていく

行為そのものといえるかもしれません。

そんな観点から芸術を捉えなおしてみると、

保育の世界は芸術で溢れていることに気がつくでしょう。

芸術ってそもそも何のためにあるんだろう？

「心」と「体」で遊ぶことが芸術

「ホモルーデンス」という言葉は、文化を「遊びの集積」と捉えて、人は遊ぶことで存在してきた歴史を示しています。それ程に人は遊ぶことに長けていて、特に子どもは感じるままに遊ぶことができる力を持っています。子どもが自発的にものに関わり、働きかけるなかで得た感覚をもとに表現していくことが、さまざまなものを生み出していきます。太陽の光で輝く水の反射が気に入った子は、その興味・関心から、足で水に動きをつけて反射の変化を楽しむかもしれません。あるいは、足元にあった落ち葉を宝物のように拾い集め、並べたり、重ねたり、置いたりしているうちに、その子の創造した世界が立ち現れてくるかもしれません。そんな風に、自由に遊びに没頭し、自分の興味・関心が赴くままに表現を深めていくなかで得た感覚を表現することが芸術であり、その過程を通して、その子ならではの感受性や感性、創造性がはぐくまれていきます。

「知」を統合して、表現する子どもたち

絵を描いたり、ものを作ったりするとき、子どもはさまざまな実体験や想像を組み合わせて、趣向を凝らしていきます。そのプロセスは言葉による語りや、絵画や音、造形による表現を重ね合わせていくことによる新たな世界の創造であり、子どもが出合った世界との関係性を深めていくための行為でもあります。アート活動を通じた表現により、子どもはものの見方を変化させたり、言葉や科学の認識を深めたり、自然や人間同志の関係を再構築したりするなどして、見方や感じ方を統合していきます。さまざまな「知」を統合していくアート活動によって、子どもは内側の世界と外側の世界をつなげていくのです。

原体験は「自分らしさ」の土台づくり

芸術の世界に正しい答えはありません。同じものを見て、同じことを感じたとしても、その表現方法は子ども一人ひとり、実にさまざまです。多様性に満ちた自然との関わりは、子どもの好きなものの発見を手助けし、感覚を研ぎ澄まさせて、心地よいと思える物事を何度も試せる機会を与えてくれます。四季折々の植物の色や形、匂い、手触りを体感していく出来事が原体験となっていくのです。自分自身の感覚や体感、その子ならではの経験に基づく思考や創造性がベースとなって、外界との相互作用のなかで自分自身を見つめることが芸術の大きな役割であり、その時間を通じて子どもは「自分らしさ」の土台をつくり上げていくことでしょう。

トゲトゲがズボンにくっついたよ!

1

偶然に起こる不思議から学びがスタートすることも。謎解きは最高の題材でもあります。そんな場面を生かして、学びのたねを育てましょう。

2

謎を解き明かす方法や道具を、子どもと考えてみましょう。調べて謎を解く時間は、子どもの「知りたい」という意欲をはぐくんでくれます。

3

わかったことをもとに、ほかのたねを探しに行きましょう。こうした探究が、自然を味わう感性や目利き力をはぐくみます。

4

自然の造形のおもしろさを楽しみましょう。特徴を言葉で表現したり、見た目で分類したり。発想したものを、ものづくりで表現してみましょう。

5

自然のなかにある不思議な造形を題材にすると、自然を感じる感性が刺激され、子どもは自由に想像力を膨らませていきます。ものづくりだけではなく、お話をつくるという表現など、子どもが得意な方法を取り入れて、豊かな発想をはぐくむ機会をつくりましょう。たねを題材にして、ほかにどのような表現が生まれそうですか?

きれいな実を見つけたよ!

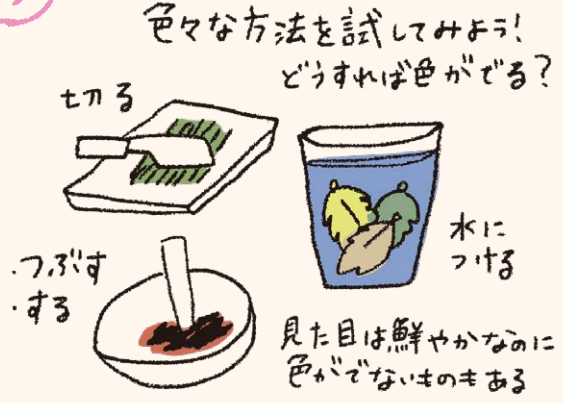
1

身近な自然を使って、表現するための材料を生み出すことができます。自然のなかにある「色」も、無限の可能性を秘めた材料のひとつです。

2

植物が持つ色を見つける旅は、自然と触れ合い、その美しさに感動する感性をはぐくみます。森や公園にいる植物たちに会いに行きましょう。

3



色を生かす試行錯誤の過程で、植物の特徴が学べます。アート活動のなかにある科学の視点も取り入れ、探究のサイクルを楽しみましょう。

4

同じ色の小さな違いに気づくことは、ものを見る解像度が高まるプロセスでもあります。同系色で分類し、使い分ける感性を育てましょう。

5

自然を材料にしてみると、購入できる材料や道具以上に工夫を凝らしたり、創造的な活動に展開したりできる可能性が広がります。自然のなかにある色や形を見つける探索を子どもと楽しむ時間が、子どもの表現の幅を広げ、創造性をはぐくんでくれるはずです。あなたなら、自然からどのような表現の材料を生み出しますか?

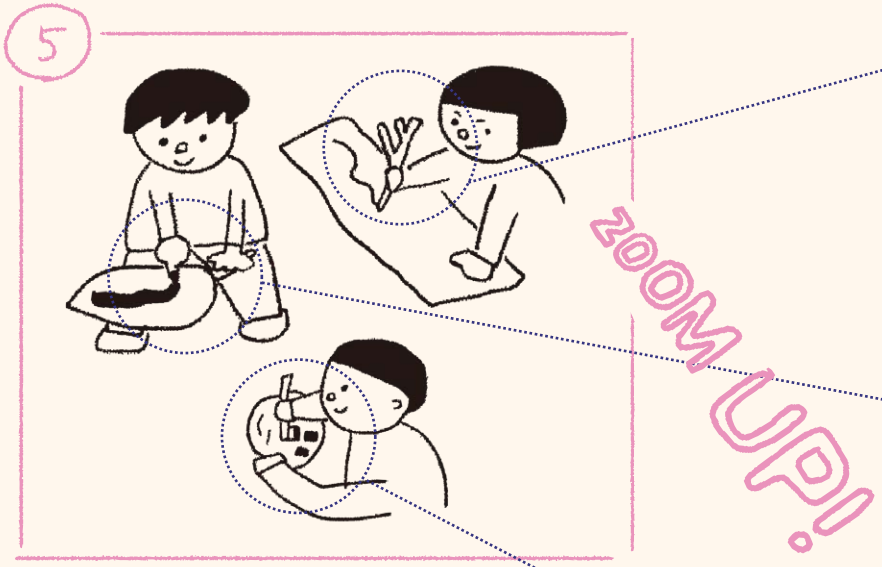
はぐくみ
ズームアップ！

『ひとつの道具』

「ひとつの道具」が子どもの創造性や好奇心に影響し、創作活動の内容に大きく作用します。どんな道具をどれだけ揃えるのか、意図とこだわりを持った選択によって、子どもの姿はどのように変化するでしょうか。

きれいな実を見つけたよ！

5



「自然の絵の具をつくって絵を描く」という場面で、子どもが使う道具が変われば、子どもの表現方法や内容にも変化が生まれます。子どもがどのような表現を好みそうなのか、興味・関心が何に向いているのかに合わせて、道具を選んでみましょう。

道具1

鳥の羽や木の枝

鳥が落とした羽、植物の枝や葉っぱなど自然由来のものを使う

自然界の材料を使うことによる「自然と一体化したような感覚」が子どもの自由な発想を引き出し、枠を超えたイメージが生まれるかもしれません。

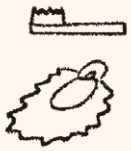
道具2

子どもの手や指

子ども自身の手や指、体を道具として使う

手や指、足の裏など、自分の体を使うことで体感できる気持ちよさとおもしろさから、ダイナミックな表現をする子どもの姿が表れてくるかもしれません。

道具3



身近な道具

たわし、ほうき、スポンジ、歯ブラシなど身近な道具を使う

日常のなかにある身近な道具も、子どものおもしろい表現を引き出すことに使えます。本来の用途とは違う使い方が創造性をはぐくみ、道具への興味を広げることにもなるでしょう。

保育の悩み事、みんなで考えよう!

はぐくみ相談室

一緒に考えてくれた人

永渕 泰一郎さん（ながぶち たいちろう）

1969年、京都府生まれ。詰め込み型の教育に違和感を抱き、幼稚園教諭となる。13年間保育の現場に携わった後、兵庫教育大学大学院学校教育研究科を修了し、幼児教育について研究する。現在は、畿央大学で現代教育学科の准教授を務める。専門は、乳幼児教育学、保育内容学（表現・環境）、保育実践、子どもの造形。なら歴史芸術文化村コミッション委員、大阪市認可外保育施設教育費給付審査部会委員、奈良県就学前教育関係者協議会委員などを担う。

お悩み 1

幼児の発達段階に応じたサポートの仕方、活動の工夫を教えてください。

「心の育ち」に注目して、保育者との信頼関係を生かしましょう。

3歳児までの子どもは、こちらの思惑どおりに何かをさせることが難しい時期でもあります。子どもが自らやってみたいと思うことを、とことん夢中になってできる環境を準備することに意識を向けてみてください。実は、手に絵の具がついただけで、それが気になって描くのが嫌になる子どもも少なくはありません。必ず手拭きなどを用意しておいて、「色がすぐに拭き取れる」ことを、言葉からも体験からも理解できるようにしておきます。心が安心・安定していないと、表現や遊びはできないものなのです。

また、できた絵は無題のままでもかまいません。素朴な表現をそのままに喜び合いましょう。
4歳児以上になると他者理解ができるようになり、自分が周りからどのように見られているのかが気になり出します。クラスのなかに、誰もが受け入れられているというムード・雰囲気があるかが重要になります。大人側と子ども側に信頼関係があるなら、保育者と1対1で描く時間をつくれるといいですね。

絵はその子を映す「心の窓」とも言われています。見本などは見せずに、目の前にいる子どもに合った声かけをしたり、話し合ったりしながら、イメージが広がるようにして自尊感情を育てましょう。

お悩み 2

心のままに自由に表現するのが苦手な子どもに「やってみよう!」と思ってもらうためには、どのような関わりや声かけをするとよいでしょうか?

「表現の選択肢」を一緒に見つけてみては?

「自由にしていいよ」と言われると、具体的に何をしたらいいのかがわからなくて不安を感じる子どももいます。そのような状況下で、戸惑い、考えすぎて表現が止まってしまうこともあるかもしれません。もしそのような姿が見られた際には、子どもの気持ちに寄り添い、「表現の選択肢」を子どもと話し合いながら、一緒に見つけることから始めてみるといいかもしれません。表現することが苦手と感じている子どもの姿を、日々の活動で観察する場合にも、たとえば「粘土で形をつくるのは苦手だけれど、粘土ベラを使って穴を開けたり切ったりする表現ならできている」というように、「表現方法のなかでもどんなアプローチならやりたいと思えるのか」を意識して見つけていきましょう。それをきっかけに、表現することへのハードルを下げることができるかもしれません。

また、絵を描きたがらない子に絵の練習を行うと、ますます嫌いになってしまいます。「友達に見られるのが嫌だ」「みんなの前では描きたくない」といった場合、まずはその気持ちを尊重してあげてください。幼児の絵は心から湧き上がる表現です。子どもが楽しそうに活動していたり、のめり込んでいる姿が見られたりした際は、今声をかけるべきか、見守るべきかを判断し、ありのままに表現している姿を受け入れつつ、どのようなやりたいことができているのかを見つけて肯定するような関わりができるといいですね。

お悩み 3

そもそも芸術のテーマで何を目指して取り組んだらいいのかがわかりません。目的やねらいをどこに定めたらいいのか教えてください。

自由な表現を受け入れる過程で子どもの心が成長すること。

芸術は子どもに表現することの楽しさや感動、精神的な安らぎや生きる喜びをもたらし、人生を豊かにする礎を築いてくれます。また、子どもが「感動する存在」に出合ったとき、その感情を表すためにさまざまな方法があることを学ぶのも、芸術の大切な目的です。「答え」や「型」がないというのも芸術の魅力で、自分が感じたことを感性が赴くままに体を使って表現したり、言葉や絵、物語といった知的活動を交えた創作スタイルで自由に表現したりすることもできます。こうして創造性や豊かな人間性がはぐくまれていくのです。

さらには、自分とは違うものをつくり、活動しているお友達の姿を通して、考えや表現が同じではない他者を尊重したり、共に生きることを学ぶことができたりするのも芸術の醍醐味といえるでしょう。芸術の分野においては、特定の目的やねらいを定めすぎず、子どもから出てくる自由な表現をありのままに受け入れていくことによって、その心はさらに生き生きと輝いていきます。こうした「心の成長」こそが、芸術の目的と捉えてもいいかもしれません。

お悩み 4

自由に表現してほしいのに、関わり方によって自由を制限してしまうようにも思います。どうすれば、子どもが自由に表現したいことを引き出してあげられるでしょうか?

やり方や提案ではなく、「問い」と「聞き取り」を心がけましょう。

子どもに自由に表現してもらいたいと思いつつも、意図せずして正しいやり方を見本として見せてしまったり、子どもが「答え」と感じるものを提示してしまったりすることはありますよね。子どもが迷っているときに「こうしてみよう」という具体的なやり方や、「こうやったらいいんじゃないかな」という定まった方針や提案を示してしまうと、子どもは「それが求められているものへの近道」だと思い、その通りにやってしまうことがあります。

こうしたシーンでは、具体的なやり方や提案ではなく、「〇〇ちゃんはこれをどうしようと思っている?」といった質問を投げかけてみましょう。まずは子どもがやりたいと思っていることがどんなものなのかを聞き取りながら、子どもの見方・考え方を尊重すると、自由を制限せずに、迷いからも抜け出すことができる場合があります。あるいは、「こちらとこちらでは、どちらがやりたいことに近い?」などの選択肢を示すことも有効です。逆にやり方が限定され過ぎていて、思い描いていることが十分に表現できないという場合は、対話をしながら道具の種類や量、やり方の範囲を広げて調整してあげられるといいですね。

写真提供:奈良文化幼稚園/森のようちえんウィズ・ナチュラ

あなたの町にもきっといる 芸術のパートナー

造形作家さん

アート活動を生業にしている造形作家さんのなかには、積極的に子どもに関わる活動をしたいと思っている方もいます。近所にいないか、探してみましょう。

芸術・美術大学の学生さん

芸術・美術大学の学生さんたちは、芸術を学ぶ専門家の卵です。楽しくアート活動を共にできるパートナーシップを組める人が近くにいるかもしれません。

美術館・博物館の人

学芸員として美術館や博物館で芸術の専門知識を生かして活躍する人たちも、企画のアイデア出しなどに協力してくれるかもしれません。